

本発表は、今まで時間量が多い副詞として扱われてきた「やっと、ようやく、とうとう、ついに…」を、時間の長さ以外の基準で再分類することを提案している。

「事態発生副詞」は「かろうじて」類と「やっと」類が属する。この類は「事態の発生が危ぶむ」／「苦労」を表し、「連続時間」・「少量表現」と共起できる。その場合、「非事態発生副詞」は置き換えられない。「非事態発生副詞」は「ついに」類が属する。この類は「個別事態を通して次の事態を予測する」ため、「継起的事態」・「マイナス価値」と共起できる。その場合、「事態発生副詞」と置き換えられない。

韓国語の「gyeou」「deudio」は日本語の「事態発生副詞」、「kkeutnae」は「非事態発生副詞」に対応するが、「deudio」は「苦労」の意味がない点、「kkeutnae」は「終わり」に焦点を当てられる点が違う。英語は「Finally」が「事実発生副詞」に、「In the end」が「非事態発生副詞」に対応する。「Finally」の話手がイベント成立を待っている状況であるなら「In the end」と置き換えできない。

1. はじめに

副詞の「ようやく、やっと、とうとう、ついに」は工藤(1985)、仁田(2002)などで長い時間が経過したことを表す副詞だと説明されている。これらの副詞は(1)のように互換的である。

(1) {ようやく／やっと／とうとう／ついに} 売れた。(作例)

しかし、これらを「長い時間」という一つの基準で分けるのは問題がある。なぜなら、

(2) {*ようやく/*やっと／とうとう／ついに} 売れなかった。(作例)

例文(2)は「長い時間の経過」ではなく、否定形の共起によって使い分けが発生している。否定形と共起する場合、「とうとう」、「ついに」は問題なく使えるが、「ようやく」、「やっと」は使えない。そこで、これらの副詞は同じ副詞として扱っていいのかという疑問が浮かぶ。従って、これらの副詞を使い分けるため、「時間の長さ」以外に考慮すべき要素は何があり、その要素が使い分けの基準になる理由は何かを考察する。そして、その基準によってこれらの副詞を再分類することを提案する。

2. 先行研究

工藤(1985)は、「やっと、ようやく、とうとう、ついに」が「変化や行為の成立・現実までの時間量の大を表す」と説明している。しかし、これらの元々の意味は「苦労したあげく」の意味を持つため、純粋な時間の副詞とは言いにくいことを指摘している。この問題に対する対策は提示されていない。

仁田(2002)は「起動への時間量」を表す時間副詞を「僅少所要型」「中期所要型」「長期所要型」に分類して、「ようやく、やっと、とうとう、ついに、…」は「長期所要型」に属すると述べている。「長期所要型」は、「事態の起動・実現までの所要時間が長期にわたっている、ということを表すだけでなく、それ以上に、事態の起動実現に至るまでの経過に多大の労力・エネルギーが費やされたという、事態現実までへの心理的な長さ、遙かさとでも言えばよいような、モーダル的な意味合いが表されている」と定義されている。しかし、「モーダル的な意味合い」が具体的に何なのかに対しては述べられていない。

つまり、「やっと、ようやく、とうとう、ついに」の使い分けを考察するためには「時間」だけでなく、他の要素にも注目すべきである。だから、本発表もこれらの副詞が「時間副詞」だという立場に異見はない。但し、「時間」以外の要素にも注目し、「かろうじて、からくも、いよいよ、しまいに…」のように「時間」と「事態の現実・非現実」に関わり、「モーダル的な意味合い」を持つ副詞も考察の対象に

入れる。従って、本発表は「やっと、やっとのことで、ようやく、ようやくのことで、ついに、しまいに、かろうじて、からくも、いよいよ、…」を「事態の発生を扱う副詞」として定義する。

3. 事態の発生を扱う副詞

本論に入る前に、各副詞がどのような意味を持っているか簡単に触れておく。「かろうじて／からくも」は（以下、「かろうじて」類）事態が成立できるか成立できないかという状況に置かれていたが、「あやうく成立した」ことを表す。「ようやく（のことで）／やっと（のことで）」（以下、「やっと」類）は話し手が「事態の成り立つまで持続的に働きかけている／意識している」状況を表す。「かろうじて」類と「やっと」類が重要視している時間の局面は少し違うが、両類は「事態発生」を前提している。だから、意味の違いは発生するが、「かろうじて」類と「やっと」類はお互いに置き換えが可能なものとして扱って「事態発生副詞」と名付ける。

「いよいよ／ついに／しまいに／とうとう」（以下、「ついに」類）は今まで事態が起きている様子から発話時現在／参照時に起こるべき事態を予測していることを表す。つまり、「事態発生を前提せず」、非現実（非過去）の事態まで述べられるため、「非事態発生副詞」と名付ける。

以上の意味特徴から共起関係の特徴が現れる。まず、「かろうじて」類と「やっと」類は「プラス価値」の要素と共起する必要がある。

(3) （駆虫剤を使い、ゴキブリが出ない状況を確認して）かろうじて／やっと {ついに} 出なくなった。

（作例）

(4) （ひびが入っている茶碗が割れた後）?かろうじて／?やっと {ついに} 割れた。（作例）

だから、起きた事態が話し手にとって「マイナス価値」であるなら、必ず「ついに」類と共起する必要がある。

また、「少量表現」と「マイナス価値」の一種である「反願望」表現が共起すると使い分けが発生する。

(5) それだけ運動して、イギリス議会での清国派兵の賛成、反対の差がかろうじて {やっと／*ついに} 九票差でしたか。（田中芳樹(1996)『中国名将の条件』B、下線・{ } は筆者、以下省略）

(6) {*かろうじて／*やっと／ついに} 売れてしまった／売れるはめになった。（作例）

例文(5)のように、「少量」を表す「九票差」が共起すると「かろうじて」類と「やっと」類は文が成り立ち、「ついに」類は文が成り立たない。また、(6)のように反願望イベントが起きた状況を表す「はめになった」が共起すると、「ついに」類は文が成り立つが、「かろうじて」類と「やっと」類は文が成り立たない。

また、テンスとの関りもある。「かろうじて」類と「やっと」類は述語の過去形と共起し、「ついに」類は述語の過去／非過去形と共起する。

(7) {かろうじて／やっと} *売れる／売れた。（作例）

(8) ついに売れる／売れた。（作例）

「アスペクト」も関わっている。「かろうじて」類と「やっと」類は「事態発生を前提」にし、一連の事態を一つの連続体に扱っているため、(9)のように「～している」形とも共起できる。

(9) アメリカで経験したこの種のパーティの典型的な内容をご紹介します。まず指定された時間より少し遅めに到着すること。まちがっても早く行ってはいけない。なにしろ準備するほうはたいへんなのだ。買い物、掃除、装飾、料理、着がえ…とめまぐるしい大奮闘の末やっと万端ととのうのは時間ギリギリに決まっている。第一ラウンドの闘いを終えた主人夫婦がホッと顔見合わせて息をととのえるぐらいの余裕は与えられるべきである。（桐島洋子(1976)『聡明な女は料理がうまい』B）

また、「かろうじて」類と「ついに」類も時間を扱う方法が異なるため、「テンス」だけでなく、「アスペクト」的面も一緒に考察するべきである。実際、(10)(11)は過去テンスが使われているが、「事態発生副詞」と「非事態発生副詞」間の置き換えができない。

(10) 母は自分から手紙を書こうとしないし、電話もかけようとしなかった。長いあいだ、叔父を介して、かろうじて {*やっと} 消息を伝え合っていました。(津島祐子(1999)『私』B)

(11) 千九百十二年一月一日に初代臨時大總統に就任した孫文は、臨時政府組織大綱の議決を受け、三日に臨時副總統黎元洪が選出されると、ただちに九人の國務員名簿を各省代表会に提出して、中華民國臨時政府の実質的体裁を整えた。かくしていよいよ {*かろうじて} 革命的な諸政策を打ち出して…(後略)。(松本英紀(2001)『宋教仁の研究』B)

(3)～(11)の共起関係をまとめると、「事態発生副詞」は「少量表現」が共起でき、「事態の発生済みを前提」としていて、「連続時間」と共起できる。「非事態発生副詞」は話し手の「マイナス価値」と共起でき、「事態の発生済みを前提」せず、「継起的事態」と共起できる。

だから、事態の発生を扱う副詞は「少量表現」・話し手の「マイナス価値」と「テンス・アスペクト」によって使い分けが発生すると言える。「少量表現」は「たった、しか、わずか…」が共起し、「マイナス価値」の「反願望」を表すときは、文末に「反願望」に関わる「てしまう、はめになる…」が共起する。また、「恥、物乞い、失敗…」のように語彙的にマイナスを表す表現も共起する。「テンス・アスペクト」からは過去形と「連続時間」が「事態発生副詞」、過去形・非過去形と「継起的事態」が「非事態発生副詞」と共起できる。

「かろうじて」類・「やっと」類・「ついに」類を考察することで、これら副詞の使い分けを分析できるだけでなく、事態の現実を表す副詞として分類し、現実・非現実副詞の範疇に入れることができると思われる。

4. 事態発生副詞

それでは、「かろうじて」類と「やっと」類の用例を見ていく。まずは、「連続時間」と共起する場合である。

(12) 「木山や上林が、この日のことを書いているからさ。玉川屋に着いたのが三時。そうしてえんえん九時まで宴会。からくも {*ついに} 終電に乗ったとき。そんだけ呑んだら、あんな色紙も書くだろう。でもね、おれはあの時代のあのひとたちが、あんがい好きなんだ。おっとユウ君お待ちかね、お蕎麦が来ましたよ」(遠藤甲太(2005)『父と子の多摩川探検隊』B)

(13) 婿養子である夕美子の父親は、下関の駅前通りに小さな店を開いている水道屋である。構治の姉は戦後間もなく夫を肺炎で失っている。その後女手一つで細々と始め、三十何年かでやっと {*ついに} 大きくした喫茶店の方を婿養子に手伝わせたがっているのだが、そういう賑やかな商売は性に合わないと言って、ほとんど店にも近づかないらしい。(連城三紀(1984)『恋文』B)

例文(12)(13)のように、「事態発生副詞」は「連続時間」を表す表現と共起できる。「連続時間」が使われると「ついに」類とは置き換えられない。「連続時間」は実際に時間がどのくらい掛かったのかを表すための表現ではない。事態が成立できるかできないかという過程で結局は成立できたか、もしくはイベントが成立するまでに苦労した過程を全部体験或いは観察していたか、という意味で「連続時間」と共起する。「事態発生副詞」は事態が成り立つまでの過程を描いているため、様々な事態を一つの連続体として扱う。

例文(12)の大山と上林は終電に乗れるか乗れないかという状況であやうく終電に乗ったことを表し、

(13)の話し手は、夕見子が喫茶店を大きくするために苦勞したことを表している。要するに、時間の表現がなくても、イベントが成り立つための辛い過程を描写する表現があれば「事態発生副詞」が使える。

(14) 息子は、今朝の出掛けに「僕、今度賞に入らないかもしれないよ。早い者と組み合わせられたから」と、予防線を張っていたそうであるが、からくも三等賞になって面目を施した。(永島克彦(2001)『あんたがたどこさ』B)

例文(14)の息子は「賞に入る」のが大変であることを予測し、両親に説明している。三等賞に入れるか入れないかという状況であやうく三等賞になった状況である。この例文には時間に関連する表現がないにも関わらず、「事態発生副詞」が使われている。

従って、「事態発生副詞」は長い時間を表す表現だと定義するより、事態が成り立つまでの過程を一つの連続体として表すものと定義するのが妥当であろう。話し手が事態の発生を危ぶむ状況にいたか、もしくは苦勞した経験があるか他者が苦勞した場面を観察していたため、「少量表現」と共起して「事態の非発生に近かったため大変だった」という「危機過去」を表すこともある。

次は、「事態発生副詞」と共起する「少量表現」の用例である。

(15) この計画縮小により、同年6月米国下院に提出された宇宙ステーション計画を中止するとの動議はわずか1票差で否決され、宇宙ステーション計画は、かろうじて {*ついに} 生き残った。(富田信之(2002)『宇宙ステーション入門』B)

(16) そこで仕方なしに西国へ行って兵を集めようとしたのだが、運が悪いときは悪いもので、海上で嵐にあつて船が難破し、たった数人の味方だけをつれて、やっと {*ついに} 吉野山に逃げこんだ。(永井路子(1978)『北条政子』B)

例文(15)(16)は「わずかな」が「生き残れない」に近かったこと、「たった」が「逃げ込めない」に近かったことを表し、「かろうじて」と「やっと」が「危機過去」を表している。この場合、「ついに」類とは置き換えられない。

5. 非事態発生副詞

次は、「ついに」類の用例を見ていく。まずは、「継起的事態」を表す表現と共起する用例である。

(17) 俺たちは、政治家として発言したことはかならず実行することを誓いあつたのだが、現実には、派閥の利害、思惑が最優先する状況のなかで、この誓いを実践できないまま脱落し、ついに {*やっと} は青嵐会という組織自体が崩壊していった。(浜田幸一(1983)『弾丸なき抗争』B)

例文(17)は「継起的事態」と共起する用例である。青嵐会が崩壊する前に、脱落、派閥利害などの個別事態があつたことを表す。このように「継起的事態」が使われるとき、「ついに」類と「事態発生副詞」は置き換えられない。

「ついに」類が「継起的事態」と共起できる理由は、事態を一つの連続体として見ているのではなく、連続性のない個別の事態として扱っているためである。個別事態が起こっている様子を見て、次の事態が起こる様子を予測するのが「ついに」類の特徴である。つまり、事態を一つの連続事態として認めるか、個別事態として認めるかによって「事態発生副詞」と「非事態発生副詞」が使い分けられるといえる。

また、個別事態からの「予測」だけを表しているため、話し手の気持ちが含まれていない。だから、事態の発生を前提せず、過去形だけでなく非過去形の述語とも共起できる。また、話し手の気持ちが含まれていないため、「マイナス価値」表現が共起できる。

次は、「非事態発生副詞」に共起する「マイナス価値」表現を分析する。

(18) 「どうせカネ目当てだろう。案内なんかいない」と、いったんは断わったが、あまりのしつこさに根負けして、とうとう{*ようやく} 物乞いのガイドで市内の名所を見てまわるはめになった。
(五島昭(1986)『インドの大地で』B)

(19) 義仲は今井の手を取って「義仲は都のうち、六条河原で当然死ぬべき立場と思われたが、そなたと一所で死のうと日頃から誓い合ったことが忘れられず、逃亡の恥も忘れて、ついに{*ようやく}ここまできてしまった」と訴えている。(馬場あき子(1977)『人物日本の女性史』B)

(18)(19)は「はめになった」「しまった」という「反願望」表現と「物乞いのガイド」と「逃亡の恥」という「マイナス価値」表現が共起している。従って、「かろうじて」類と「やっと」類に置き換えられない。つまり、「継起的事態」と「マイナス価値」表現は「ついに」類の特徴だといえる。

事態を一つの連続体としても、個別事態としても解釈できる場合は「事態発生副詞」と「非事態発生副詞」が置き換えられる。

(20) 新婚の頃は少しは自惚れもあつて、そんな邦男の言葉を嫉妬の変形だと考えていた時もある。けれども結婚して六年たった今では、夫のそうした言動は、単に子どもじみた所有欲のあらわれだとやっとな{ついに} わかってきた。(林真理子(1985)『最終便に間に合えば』B)

6. 英語／韓国語との比較

韓国語の「gyeou(겨우)」は「かろうじて」に、「deudieo(드디어)」と「kkeutnae(끝내)」は「ついに」に訳されることが多い。しかし、「gyeou」と「deudieo」は「マイナス価値」が共起できないという点で「事態発生副詞」に対応し、「kkeutnae」は「マイナス価値」と共起できるという点で「非事態発生副詞」に対応する。

(21) namboda myeoch sigan iljjig, geuligo namboda myeoch sigan deo neujgekkaji kkeungi
issge myeochnyeongan gyesoghadeoni nojeom-eul geodugo gageleul yeol-eo 'gudu byeong-
won'ilaneun meosjin ganpan-eul geol-eossda. geuligo tto geu myeoch nyeon dwi geuneun
deudieo 'sujehwa jeonmun 00yanghwajeom'ilaneun jeompoleul gajge dooeossda. (M)

日本語訳) 誰より何時間も早く、そして誰より何時間も粘り強く何年間も続いたら、露店を撤収して店を開き「靴病院」という格好いい看板を掛けた。そしてまたその何年後、彼はやっとな「手作り靴専門 00 洋貨店」という店舗を持つことになった。

(22) geunal-i doemyeon aein-i dol-aol geolago midgo iss-eossjiman kkeutnae yeojaneun dol-aoji anhneunda. (M)

日本語訳) その日になったら恋人が帰ると信じていたが、ついに女は帰ってこない。

「gyeou」、「deudieo」が「連続時間」と共起でき、「kkeutnae」が「継起的事態」と共起できる点も日本語と対応している。

(23) i gaunde tongsinbeob-ui gaejeong-eun hollingseubeob-an deung-eulo myeoch beon sang-won-e jechuldooeossda bugyeoldooeoss-euna deudieo {?kkeutnae} 60yeo nyeon man-in
1996nyeon 2wol saeloun tongsinbeob-i tong-gwadoem-eulosseo jeonhwasa-eobgwa keibeultibeu-
i sa-eobgan-ui gyeong-gyega salajyeo guggajeongbogiban malyeon-e hoeggijeog jeongileul
malyeonhaessdaneun pyeong-galeul deudgo issda. (M)

日本語訳) このうち、通信法の改正は、ホールスリングス法案などで何度か上院に提出されて否決されたが、やっとな{*ついに} 60年ぶりの1996年2月に新しい通信法が通過されることで電話事業とケーブルテレビ事業間の境界が消えて国家情報基盤作りに画期的転機を用意したという評

価を聞いている。

- (24) geuleoji anh-ado baes-sog-ui geobugseuleoun geosdeul-i ollimineunde, geunom-ui geos-eul mulgo anj-aseo ppang-eul ssib-eulyeonikka, samkyeossdeon gomugwangwa hamkke ontong modu ssod-ajyeo naobnida. geulaedo naneun kkeutnae {?deudieo} uisau myeonglyeong-e bogjonghaesseubnida. (M)

日本語訳) ただでさえお腹の気まずいものが出ようとしているのに、それを嘔みながらパンを食べようとしたら、飲み込んだゴム管と一緒にすべたが出てきます。それでも私はついに{やっと}医師の命令に服従しました。

しかし、「gyeou」と「deudieo」が「事実発生副詞」、「kkeutnae」が「非事態発生副詞」と全く同一の関係にいるとは言えない。

- (25) geuleona yeollyeolhan salang-i chacheum geu yeoldoleul ollyeogage doeja geu sonyeoneun nun-e boige byeongsega aghwadoeeo ganeun geos-ieossda. geulihayeo deudieo sonyeoneun juggo mal-assda. (M)

日本語訳) しかし、熱烈な愛が徐々にその熱度を上げることになると、その少女は、目に見えるほど病状が悪化していくのだった。そして、*やっと少女は死んでしまった。

- (26) bulganeunghan geos-i ganeunghaejindaneun geos-eun jayeon-ui beobchig-i jibaehaneun segyeeseon iss-eul su eobsda. sigangwa gong-gan-eul chowolhaneun yojeong-i deungjanghandageona yasuga gongja(gongja)lo dungab-eul handageona salam-i oepulsolo jeonsin(jeonsin)eul handageona haneun geos-eun jayeongyeeseon kkeutnae bulganeunghan geos-ida. (M)

日本語訳) 不可能が可能となるのは、自然の法則が支配する世界ではありえない。時間と空間を超越する妖精が登場したり、野獣が孔子（公子）に変身をしたり、人が牛に変身（轉身）をした
りするのは自然界では*ついに不可能である。

(28)の例文は、文末に「～てしまう」と共起できる点が「事態発生副詞」と違う。その理由は「deudieo」は「やっと」類のようにイベントが発生するまでの「苦労」という意味が含まれていないからである。また、(29)は「結局」の意味として使われている。これらの意味が発生するのは、「kkeutnae」が事態を個別的に扱うだけでなく、「事態の終わり」（「kkeut（終わり）」に焦点を当てることもできるからである。

英語の場合、「Finally」が「事態発生副詞」に、「In the end」が「非事態発生副詞」に対応する。しかし、「Finally」と「In the end」は日本語の「事態発生副詞」と「非事態発生副詞」と置き換えの条件が違う。「Finally」の話し手がイベントの成立を待っている状況なら置き換えが難しくなる。また、否定形と共起できるのは「In the end」である。

- (27) The food finally {*in the end} arrived at the end of last week and distribution began. (C)

- (28) I toyed with the idea of calling the police, but in the end{*finally} I didn't. (C)

「Finally」が「連続時間」と共起でき、「In the end」が「継起的事態」と共起できる点は日本語と同じである。

- (29) Finally{*In the end}, after ten hours of negotiations, the gunman gave himself up. (C)

- (30) We were going to ski in Austria, then the South of France and in the end{*finally} we decided to go to Italy. (C)

7. おわりに

本発表は「やっと、やっとのことで、ようやく、ようやくのことで、ついに、しまいに、かろうじて、からくも、いよいよ、…」を「事態の発生を扱う副詞」と定義して考察を行った。今までの考察では「長時間」という要素だけでこれらの副詞を定義しているが、本発表では「時間の量」以外にも「少量表現」・「マイナス価値」と「事態の扱い方」まで考慮し、これらの副詞を「事態発生副詞」と「非事態発生副詞」に分けたことに意義がある。また、これらの副詞は事態の現実に関わる副詞であるため、「時間」の範疇だけでなく、現実・非現実副詞の範疇に入れることもできる。

「事態発生副詞」には「かろうじて」類と「やっと」類が属する。この類の副詞は事態を一つの連続体として扱うため、「少量表現」・「連続時間」と共起できる。その場合、「非事態発生副詞」は置き換えられない。イベントが発生するまで「事態の非発生に近かったため大変だった」という意味が現れるため、事態の発生を前提し、過去形が現れ、「危機過去」の意味が出てくる。

「非事態発生副詞」には「ついに」類が属する。この類の副詞は個別事態が起こっている様子を見て次の事態が起こる様子を予測するため、「マイナス価値」・「継起的事態」と共起できる。この場合、「事態発生副詞」と置き換えられない。個別事態からの「予測」だけを表しているため、話し手の気持ちが含まれることなく、事態の発生を前提せず、過去形だけでなく非過去形の述語とも共起でき、「マイナス価値」が共起できる。

「事態発生副詞」と「非事態発生副詞」が置き換えられるときは、事態を一つの連続体とも、個別事態とも解釈できる場合である。

韓国語の「deudioe」は「苦労」の意味がないため、「危機過去」の意味が現れない。「kkeutnae」は「終わり」に焦点を当てられるため、「結局」の意味としても使う。英語は「Finally」の話し手がイベント成立を待っている状況なら「In the end」と置き換えできないが、「Finally」が「連続時間」と共起でき、「In the end」が「継起的事態」と共起できる点は日本語と似ているところである。

参考文献

工藤浩(1985)「日本語の文の時間表現」『言語生活』6月号筑摩書房 pp. 48-56

工藤浩(2016)『副詞と文』ひつじ書房

ジョンビョンミン(2019)「反事実・非現実を表す副詞—『もう少しで』型と『あやうく』型を中心に—」

『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第64輯』pp.183-201

仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版

서반석(2018)「결과의 비접속 부사 연구-‘결국, 끝내, 드디어, 마침내’를 중심으로-」『국어학』87, 237-265, 국어학회

参考コーパス

現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ、Bで省略)

世宗マルムンチ (Mで省略)

参考辞典

『ニューエース日韓辞典』金星出版社

『日本国語大辞典』小学館

<https://stdict.korean.go.kr/main/main.do> (標準国語大辞典)

<https://www.collinsdictionary.com/> (Collins COBUILD、Cで省略)